



手前、向かって左、シルバーのクルマが、モット製のボディを載せる1951年型フィアット・エルミーニSI(スポルト・シルバー)。右が同じくシルバーボディのフィアット・エルミーニ49年型SI、奥の左が52年型エルミーニ1100SI(スポルト・インターナツィオナーレ)、右が47年型ランチア・バガーニだ。

いつしか、エウジエニオ少年も整備の手伝いをするようになっていた。「僕の手は、宝石の仕事をしているとは思えなかったよ」と、エウジエニオ社長が笑う。「いまもね」。

### 趣味とビジネス

遠来の訪問者に気を遣ってか手に入れて10年になる銀色のエルミーニ1100SI(51年)のエンジンをかけてくれた。カウルをはずしてエンジンを見せ、コクピットに腕を伸ばしてキーをひねった。手慣れた様子でキヤブレターのスロットルを引っ張り、ブリッピングさせる。このクルマに乗ってシチリアに行ったことも、複製版タルガ・フーリアに招待されて、参加し

たこともあるという。アイドリリングが安定すると、12歳のときから集めはじめたという資料、雑誌の切り抜き、パステイノ・エルミーニの弟さんから手に入れたという大量の写真を取り出して来て、それぞれクルマの詳細、ヒストリーについて説明してくれた。話が尽きない。大層な研究家なのだ。

隣の赤いSI(49年)は、取材した20日前に購入したばかり。まだまだ手を入れるところが沢山ある。

エウジエニオさんは父譲りの手先を活かして、メーターの数字を描き、必要なパーツを自作する。こういったワンオフに近いマイナーな「虫」たちは、それくらいでないとも動的に維持す

ることはできないのだろう。もちろん、構造がシンプルということもあるけれど。先ほど目を留めた金くずは、ステアリングホイールのスターをつくった跡だ。「リムはクルマ材でつくったんだ」と、宝飾メーカーの社長がさらりという。

ときにビジネスの状況はどうですか？

隙を見てリポーターが話題を変えると、エウジエニオさんはすこし改まった顔で、「ウチのアクセサリーは、ルネサンス・スタイルを採ります。ある程度の知識があるヒトでない、理解するのがむずかしい」と話しはじめた。

1500年代の職人から名前をとった同社のチェリーニ・コレクション(シリーズ)は、カンバーニヤ地方、シチリアで人気があるそうだ。「職人を使って、いいものをキチッと売って。僕のクルマに対する情熱は、古い様式を大切に作る宝飾のスタイルと、どこかで結びついているんだと思う」。

キレイにまとめてくれた。別れ際に、「どうしてエルミーニを集めるんですか？」とあまり知恵のない質問をすると、エルコーリ氏は歩きながらにこやかに応えてくれた。

「ポローニャにオスカ、トリノにチンタリア、そしてモデナにはスタンゲリーニがあるように、フィレンツェにはエルミーニがある。つまり、そういうことだよ」

そういうことなんだろう。さようなら。門が開まって、われわれは次の取材地へ向かった。



エウジェニオ・エルコーリさん。ちなみに、エルコーリという姓は、エトルリア時代からある古い名前だそう。トラディショナルなデザインをもつアクセサリーを揃えた宝飾業を営む。EURODIAMANT(www.eurodiamant.it)。



濃い赤色にペイントされたランチア・バガーニ。カロツツェリア・コッリ(COLLI)のボディを架装する。